



TITLE:

京大広報 No. 689

AUTHOR(S):

京都大学渉外部広報・社会連携推進室

---

CITATION:

京都大学渉外部広報・社会連携推進室. 京大広報 No. 689. 京大広報  
2013, 689: 3921-3936

ISSUE DATE:

2013-05

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/196384>

RIGHT:



# 京大広報

No. 689

2013.5



アウン・サン・スー・チー氏に京大名誉フェローの称号を授与する松本 紘総長  
—関連記事 本文3926ページ—

## 目次

京都大学のさらなる発展のための基盤作り —財務体質の強化と自立した施設整備— 財務・施設・環境安全保健担当理事・副学長 西阪 昇	3922
〈大学の動き〉	
名誉教授称号授与式を挙行政	3924
退職者功労表彰式を挙行政	3925
北部グラウンド完成式典を挙行政	3925
アウン・サン・スー・チー氏に名誉フェローの 称号を授与、講演会を開催	3926
〈部局の動き〉	
先端技術グローバルリーダー養成プログラム 最後の修了式を挙行政	3927
〈寸言〉	
京大で学んだ「愛」について 黒瀬 晃	3928
〈随想〉	
『想定外』に対応できる人材の育成を 名誉教授 代谷 誠治	3929

〈洛書〉	
モノとのつきあい 下田 宏	3930
〈話題〉	
科学技術戦略推進費・戦略的環境リーダー育成 拠点形成事業「環境マネジメント人材育成 国際拠点」第5回シンポジウムを開催	3931
図書系職員の海外調査研修を実施	3932
宇治キャンパスで桜植樹記念式典を挙行政	3932
人文科学研究所 第8回 TOKYO 漢籍 SEMINAR を開催	3933
電子書籍「世界の料理」を発行	3933
化学研究所所蔵「人造石油」の資料が化学遺産に 認定	3934
宇治おうばくプラザで「第4回たそがれ花見 コンサート」を開催	3935
第1回 START 2013新入生歓迎大交流会を開催	3935
〈訃報〉	3936

京都大学渉外部広報・社会連携推進室

<http://www.kyoto-u.ac.jp/>

## 京都大学のさらなる発展のための基盤作り ―財務体質の強化と自立した施設整備―

財務・施設・環境安全保健担当理事・副学長 西阪 昇

京都大学が、先達の築いてこられた伝統を踏まえ、さらに発展し、輝きを増していくためには、各部局に所属する先生方がその本務である教育・研究活動に存分に力を発揮していただくことが最も重要である。財務・施設・環境安全保健担当の私の仕事は、それらの先生方の活動を資金、施設、環境面から支えていくことであると認識している。しかしながら、近年、特に財務面では、毎年、各部局の予算の削減をお願いしていることなど、大変心苦しく思っている。右肩上がりの予算の時の担当であればどんなによかったかと思いつく思っている。

そんな中で、平成25年度から、各部局の皆様これまで以上に負担をおかけすることとなる、学内予算配分の抜本的見直しと施設修繕計画の策定という大きな制度改革を実施することになった。制度の検討の過程では、様々にご意見、ご要望、ご批判をいただいたところであり、それらをできるだけ取り入れて制度設計をしたつもりであるが、それぞれの立場からは、なお、不満もあろうかと思っている。

しかしながら、平成16年度の国立大学法人化に当たり、本学は基本的にそれまでの文部科学省直轄の“国立大学”時代の仕組みを踏襲して今日に至っているが、法人化10年目を迎え、さらに、今後も国の厳しい財政状況が続くことが予想される中で、国立大学“法人”として、さらなる発展を目指していくためには、これまでやってきたことを是とするのではなく、現状を踏まえつつ将来を見据えた新しい大学運営の仕組みの構築が必要であり、本学としてもいつか取り組まなければならない課題であったと思う。

今回の二つの取組は、大学の今後のすべての課題に対応できるものではないが、“国立大学法人”京都大学としてのさらなる発展のための基盤作りの第一



のステップであり、財務体質の強化、自立した施設整備のためには、今後とも継続した制度見直し、運営改革が必要であると考えている。

### 1 財務体質の強化

今回の学内予算配

分の抜本的見直しの取組みで目指した最大のねらいは、本学の財務体質の強化、改善であった。国の財政状況に左右されず、長期的な展望を持って大学の運営、すなわち、各部局の運営がおこなえるような、大学の予算構造への転換を目指したものであった。そのため、国立大学時代の予算の様々な経緯を引き継いできた中で、全体的に必ずしも整合性がとれていない予算配分の在り方を現状ベースで全面的に見直すとともに、各部局の運営に最低限必要な基盤的運営経費は、国の予算編成の状況に関わらず、毎年一定額を配分しつつ、各部局の特色ある取組みや将来の発展のための新しい事業を全学的な観点から支援していく仕組みを構想したものである。

ただ、残念ながら、国の公務員給与削減方針への対応と時期が重なり、各部局への配分予算が、当初予定していた以上の削減案になってしまうこととなり、その緩和、配慮策の検討の中での現実的な対応として、今後ともこれまで同様、国の予算状況に合わせた定率減額を続けなければならなくなった点など、当初の構想の一部を見直さざるを得なかった。

今後は、このような点の検討を引き続き行うとともに、国からの限られた財源の学内有効配分のためには、今回は手を付けられなかった、各部局の事業実施、決算状況を反映した予算配分の仕組みの検討も必要であると考えている。

## 2 自立した施設整備

国の施設費予算は、事業費予算以上に厳しい状況が続いている。補正予算頼みという状況であり、当初予算で対応できているのは、全国の国立大学の需要のごく一部である。本学は、幸いにして、ここ数年、国の予算採択では、全国トップクラスの採択率であるが、それでも、各部局からいただいている要望に十分対応できていない状況にある。

国からの予算措置を手をこまねいて待っているだけでは、本学のように多くの施設を抱える大学は、老朽化が進むばかりである。

文部科学省直轄時代は、国の予算措置を待つしかなかったが、法人化後は、様々な工夫も可能になっている。その一つの有力な取組みが、いわゆるスペースチャージの仕組みである。

一口にスペースチャージと言っても、いろいろな方式が考えられるが、本学では、2年間をかけて、できるだけ各部局の意見、要望を取り入れ、今回の施設修繕計画として取りまとめたものである。これにより、国の予算措置にかかわらず、少なくとも、既存施設の老朽化対策として最低限必要な長寿命化のための定期的な修繕は、全学的な観点から計画的に行えることとなった。

それとともに、本制度のねらいとしては、大学の施設は、本来、各部局固有のものではなく大学全体のものであるという意識を構成員の皆様を持ていただき、全学的な観点から、限られた施設の有効活用を進めていく点も大きな要素として含まれている。これまでの経緯等で、必要面積に対する整備率が非常に低い部局、新設予算がなかなかつかない中で老朽施設に暫定的に分散して入っていただいている部局も学内には存在する。

この制度の実施を含め、いろいろな機会を通じて、この点の是正も図り、全学的な観点から、必要な活動を適切に支援していくことができるよう、施設の整備、運営を図っていきたいと考えている。

## 3 新しい展望

平成24年度補正予算では、国立大学への出資事業が新しく措置されたことや、予算をごく限定された大学に重点投資されるなど、国立大学を巡っても新しい動きが出てきている。特に、出資事業との関係では、子会社運営が可能となるような法令改正の検討も国において進められている。今後の動向によっては、国立大学法人化が新しい段階に進む可能性もあり、期待を込めて注視していきたいと思っている。

ただ、国のこういう新しい動きの如何に関わらず、本学としては、国の財政状況に大きく影響を受けないような財務運営が可能となるよう、これまで以上に国の予算以外の新しい財源の確保、さらには創出への取組みが不可欠であると考えている。

この点では、競争的資金の獲得努力に一層力を入れていくとともに、新しい財源としてまだまだ未開拓で潜在的可能性が大きい、同窓生を含めた個人、企業からの継続的な寄附獲得に積極的に取り組む必要があると考えている。私立大学や欧米の大学の取組みも充分参考にして、外部人材の登用も含め体制を充実し、本格的に取り組んでいく時期だと思っている。

また、施設整備の点では、これまでも、PFI (Private Finance Initiative) 整備事業など民間資金を活用した整備にも取り組んでいるが、今後は、土地を活用した民間との共同開発の可能性等も探していきたいと考えている。

国からの予算は大変厳しい状況にあるが、こういう時期だからこそ、常に前向きの姿勢で、京都大学のさらなる発展のため、全力を尽くしていく所存であり、関係の皆様のご理解、ご協力を引き続きお願いする次第である。



## 大学の動き

### 名誉教授称号授与式を挙る

4月4日(木)午前11時から、百周年時計台記念館において、理事、監事、副学長、副理事、理事補、部局長の出席のもとに名誉教授称号授与式が挙行された。

総長より称号を授与された方は、次の63名である。



氏 名	推 薦 部 局
夫馬 進	文学研究科
野田 公夫	農学研究科
山梨 正明	人間・環境学研究科
尾野 照治	人間・環境学研究科
松本 英治	エネルギー科学研究科
岡田 敬司	人間・環境学研究科
勝山 清次	文学研究科
宮崎 健創	エネルギー理工学研究所
林 信夫	法学研究科
武藤 誠	医学研究科
井上 國世	農学研究科
高松 伸	工学研究科
松下 和夫	地球環境学堂
小林 正美	地球環境学堂
小山 昭夫	原子炉実験所
野田 章	化学研究所
泉 拓良	文学研究科
麥谷 邦夫	人文科学研究科
堀 道雄	理学研究科
永田 雅人	工学研究科
村田 幸作	農学研究科
中尾 一和	医学研究科
間宮 陽介	人間・環境学研究科
奥村 正悟	農学研究科
義家 敏正	原子炉実験所
酒井 英昭	情報学研究科
小松 幸平	生存圏研究所
宮崎 則幸	工学研究科
鈴木 実	工学研究科
平田 孝	農学研究科
西和田公正	理学研究科
川井 秀一	生存圏研究所

氏 名	推 薦 部 局
吉田 進	情報学研究科
椿 宜高	生態学研究センター
岡村 周一	法学研究科
酒井 徹朗	情報学研究科
岡 二三生	工学研究科
田中 秀夫	経済学研究科
三浦 孝一	工学研究科
成宮 周	医学研究科
菅 佐和子	医学研究科
尾形 幸生	エネルギー理工学研究所
太田 隆夫	理学研究科
牧野 俊郎	工学研究科
三輪 哲二	理学研究科
伊藤 信行	薬学研究科
津田 謹輔	人間・環境学研究科
前川 覚	人間・環境学研究科
芹川 忠夫	医学研究科
小野 公二	原子炉実験所
岩井 敏洋	情報学研究科
太田 誠一	農学研究科
九後 太一	基礎物理学研究所
藤原 建紀	農学研究科
吉原 博幸	医学部附属病院
澤田 安樹	低温物質科学研究センター
柴田 誠一	原子炉実験所
椎葉 充晴	工学研究科
光山 正雄	医学研究科
福嶋 雅夫	情報学研究科
藤吉 好則	理学研究科
吉川 研一	理学研究科
小林慎太郎	地球環境学堂

(総務部)

## 退職者功労表彰式を挙行政

退職者功労表彰式が3月28日(木)に本部棟大会議室において挙行政され、松本 紘総長、江崎信芳理事・副学長、浅野敦行副理事、被表彰者19名が出席した。

退職者功労表彰式は、退職時において勤続年数が30年以上の教職員ならびに有期雇用教職員に対し、その永年にわたる功労を讃えるため、今年度から創設されたもので、平成24年度末の被表彰者は40名であった。

表彰式では出席の被表彰者の氏名を紹介した後、松本総長より、代表者に対して表彰状が授与され、祝辞が述べられた。祝辞では、本学に対して永年一人ひとりが尽力されて大学の名誉が築かれてきたこと、今後は各々が育てて来た後輩たちに引き継がれていくことに触れ、感謝の言葉が述べられた。



松本総長による挨拶

祝辞の後は、松本総長、江崎理事および浅野副理事との記念撮影を行う等、各々交流を深め、和やかな雰囲気の中で式が終了した。

(総務部)

## 北部グラウンド完成式典を挙行政

4月1日(月)、北部グラウンドにて、グラウンド完成式典を挙行政した。昨年11月下旬より行われていたグラウンド人工芝化工事が竣工したことを受けて開催されたもので、松本 紘総長、赤松明彦学生担当理事・副学長、間藤 徹理事補、小田滋晃体育会会長らが出席した。

今回の工事では、アメリカンフットボールやサッカー、ラクロスなどに使うフィールドが人工芝に張



学生代表の挨拶

り替えられ、また、1周500mの陸上トラックも全てウレタン舗装がなされた。

式典では、松本総長から「学業との両立は簡単ではないが、自分自身



松本総長の挨拶

をしっかりと鍛えてほしい」との挨拶があり、続いて、赤松理事・副学長から「学生が安全に練習できる環境が整ったことを喜ぶたい。また、社会の一員としての自覚を持ち、ルールを守ってグラウンドを使用してもらいたい」との挨拶があった。

式典当日はアメリカンフットボール部の新入生歓迎イベントも開かれ、新しいグラウンドが多くの新入生で賑わった。

(学務部)



## アウン・サン・スー・チー氏に名誉フェローの称号を授与、講演会を開催

4月15日(月)、ミャンマーの国民民主連盟議長であるアウン・サン・スー・チー氏が本学を訪問された。松本 紘総長より、同氏に京都大学名誉フェローの称号を授与した後、百周年時計台記念ホールにて講演会を開催した。同氏の来日は、昭和60年10月1日～61年6月30日までの9ヶ月間、東南アジア研究センター(現東南アジア研究所)に在籍していた時以来27年ぶりのことである。

同氏は、平成3年「民主主義と人権回復のための非暴力闘争」によってノーベル平和賞を受賞されたほか、アメリカ合衆国議会名誉黄金勲章(平成20年)なども授与されている。現在は平成23年に発足した現政権下で下院議員として、政権との和解と民主化に益々力を発揮されている。

午前11時前に百周年時計台記念館正面玄関に到着された同氏を、三嶋理晃病院・国際担当理事・副学長が出迎えた。続いて、同氏は同館2階迎賓室にて松本 紘総長を表敬訪問された。迎賓室では、他に赤松明彦学生担当理事・副学長、淡路敏之教育担当理事・副学長、江崎信芳総務・企画・情報環境担当理事・副学長、西阪 昇財務・施設・環境安全保健担当理事・副学長、吉川 潔研究担当理事・副学長、清水 展東南アジア研究所長も同氏を歓迎し、懇談をされた。

その後、百周年時計台記念ホールへ移動され、冒



講演を行うスー・チー氏

頭、松本総長から、特に優れた業績により国内外で高い評価を受けていることを理由に、同氏に対し本学で第一号となる名誉フェローの称号が授与された。その後、赤松理事・副学長の司会進行により“Socio-Political Change in Recent Burma and Women's Participation in It”というテーマで講演をされた。講演後は質疑応答のセッションが設けられ、学生からの熱心な質問に対し真剣かつ時には笑顔で親身に答えられていた。最後に学生代表から花束の贈呈があった。

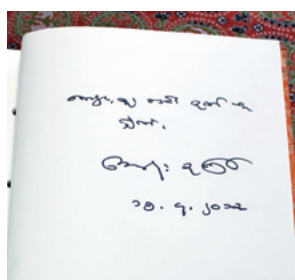


学生代表からの花束贈呈



迎賓室での集合写真

講演会終了後は東南アジア研究所を訪問された。在籍時は、ビルマの独立運動を主導した「ビルマ建国の父」こと父アウン・サン将軍についての研究に従事されていた。研究所では、清水所長ほか教職員の出迎えの後、同氏ゆかりの品々を展示している東棟3階の「アウン・サン・スー・チールーム」(\*)を訪れ、世界各国から同ルームを訪れた方々の記帳書



「スー・チールーム」を訪れた人が記載する芳名録の最後のページに「感謝と誇りをこめてアウン・サン・スー・チー 15. 4. 2013」とサインをするスー・チー氏

やアルバムを閲覧し、懐かしみながら当時の思い出を語られ、研究所メンバーと和やかに懇談をされた。最後に中庭で研究所教職員から花束が贈呈され、記念撮影を行い、本学への訪問日程を終了された。



「スー・チールーム」にて  
当時を懐かしむスー・チー氏

※同氏がノーベル平和賞を受賞したことを記念し、同氏が使用していた研究室を改装してゆかりの品々を展示して保存。同氏の誕生日である6月19日を選び、平成4年6月19日に開設した。

(研究国際部)

## 部局の動き

### 先端技術グローバルリーダー養成プログラム最後の修了式を挙行

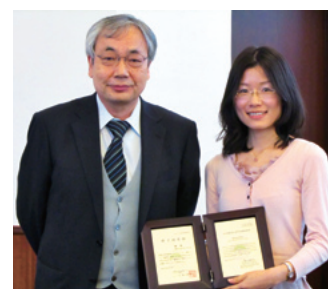
3月25日(月)、楽友会館において、先端技術グローバルリーダー(GL)養成プログラムの最後となる8期生の修了式を挙行了した。

同プログラムは、科学技術振興機構の支援を受けて工学研究科と薬学研究科が連携し、平成20年度から実施してきたが、平成24年度末をもってプログラムの期間を満了した。

最後の履修生となった14名は、同プログラムが提供する双方向教育型共同研究、産官学交流塾、実践英語教育、知財教育を履修し、晴れて修了式を迎えることになった。

式典には、双方向教育型共同研究および産官学交流塾に協力いただいた連携企業・機関の方々、修了生、関係教員などが列席し、和やかに執り行われた。来賓挨拶の後、長谷部伸治GL養成ユニット長より全課程を履修した13名に修了証書が、就職内定により履修を中断した1名に履修証明書が授与された。

修了生の挨拶では「本プログラムで学んだことを社会で活かしたい」、「異分野の研究に触れたことで視野が広がった」、「英語力が向上した」などの感想が述べられた。



長谷部ユニット長から  
修了証書を授与される修了生

本プログラムでは、当初の目標の70名を上回る72名の国際的に活躍するリーダーを養成することができ、列席した関係者、修了生からはプログラムの終了を惜しむ声が聞かれた。

プログラムの詳細は以下で公開している。

(日本語) <http://www.t.kyoto-u.ac.jp/ja/ugl>

(英語) <http://www.t.kyoto-u.ac.jp/en/ugl>

(先端技術グローバルリーダー養成ユニット)



## 寸言

## 京大で学んだ「愛」について

黒瀬 晃



四回生を迎える春、某企業の採用の最終面接を受けた時のことであるが、ある役員から「大学で学んだことで何が一番重要だったか」との質問があった。私はしばらく考えてから、「大学には多種多様な人材が集まってきており、それぞれが納得出来る論理を展開する。結果として、多様な価値観の存在を認めざるを得ないことに気付いた。いわば価値の多様性とか、価値の相対性を学んだことが最も重要なことだと思う」と答えたが、これに対し「では、貴君は何を信じるのか」と反問された。よく考えると、この反問に答えるだけの用意を当時持ち合わせていなかったのだが、答えることが出来なければ何も勉強して来なかったということにもなるとの思いから、咄嗟に答えた答えが、「それは愛です」というものだった。何故このような問の抜けた答えをしたのか。

この会社からは、幸いにもその後内定の通知を頂いたが何となく行き辛く、結局別の会社、住友銀行に就職してしまった。

その後銀行を卒業し、12年前に銀行の指示で、ある中堅企業に再就職をした。御多分に洩れずバブル崩壊以降の不景気の影響を受け、業績は低迷していた。私はこの苦境を一挙に打開する方策として企業統合を計画し、その実現に奔走した。現在私が社長を務めているジャパンパイルは三社統合によって、このような経緯で平成17年に設立された会社である。この会社は建物の基礎を建設する分野では現在日本最大の会社となっている。この三社統合ということは、いわゆるM&Aということだが、如何にして実現するかとなると口で言うほど簡単ではない。企業価値を計算して合理的な統合比率を決定し、ということだが、合理的とは何に対して合理的なのか。異なる会社には異なる価値観が存在する。しかも統合

するのは三社だ。異なる価値観をどう融合するのか。結論からいうと、会社統合を決断する最大の要素は「情熱とビジョン」である。お金ではない。異なる価値観の橋渡しをするのは、自分の会社が将来どうなりたいのかという夢のあるビジョンである。

この点については、最近ベトナムの同業の最大手企業と2年半に亘って話し合った末に、49%出資して、ジャパンパイルが筆頭株主になった経緯でも同じことが言える。最後に、相手会社の社長が決断したのは、ジャパンパイルと共通の夢、ビジョンを持ったからである。そうなるとお金のことはもちろん大事だが、強い主張ではなくなった。

また、リーマンショック後に直面した急激な業績悪化の為、組合とは厳しい交渉を余儀なくされたが、組合と最後に折り合えたのも会社の未来への共通の思い、夢のあるビジョンであったように思う。

論理はもちろん重要だが、それだけでは人間は動かない。誠実な対応というがそれだけでもダメだと思う。異なる論理を統合するもっと高次元の何かが必要だ。それがビジョンなのか愛なのか。採用面接で咄嗟に口にした「愛」、この言葉で当時私は自己嫌悪に陥ったのだが、その後も折に触れ何故このような言葉を口にしたのか考え続けてきた。今でも明快な答えに辿り着いてはいないが、これまでの人生を通じて、すくなくとも京大で学んだ「愛」という言葉に表象される価値ある「何か」ではなかったかと思えるようになってきている。

大学入学直後の5月に学内で開かれたハイゼンベルク氏と湯川教授の不確定性原理についての討論会で感動したことから私の京大生活は開始されたが、異なる価値観等京大で学んだことは本当に大きかった。専門分野のみならず、幅広くかつ高度な知識に自由に接することが出来、素晴らしい同窓生にも恵まれた京大で学べたことを、私は心から感謝している。

(くろせ あきら ジャパンパイル株式会社 代表取締役社長 昭和46年経済学部卒業)

## 随想

## 『想定外』に対応できる人材の育成を

名誉教授 代谷 誠治

筆者は定年退職の3週間後から原子力安全委員会の委員を2年半弱務めた。同委員会においては、我が国の原子力安全を国際水準に照らして最高のレベルとすることを目指し、2010年12月に「原子力安全委員会の当面の施策の基本



方針について」(以下、「基本方針」という)を決定した。そして、2011年2月から「基本方針」の推進に向けて外部の専門家との意見交換を開始し、「安全確保の基本原則」に関する議論を始めた矢先、東日本大震災に端を発した東京電力(株)福島第一原子力発電所における未曾有の原子力事故が発生した。我が国で過酷事故(シビアアクシデント)が現実起きたことは、「基本方針」にシビアアクシデント対策の高度化を掲げていたこともあり、慙愧に堪えない。

この事故に際して、事業者には「未曾有の大震災という『想定外』の事象に起因する不可抗力の事故」と主張する向きがあった。確かに如何なる施設についても、設計時に全てを想定し切って対応することはできない。しかし、原子力安全においては『多重防護』(『深層防護』ともいう)の概念が適用されており、『想定外』事象への対応がなされなければならない。実際、「5層の『多重防護』策」が採られ、想定内事象については第3層までの防護策で対応し、『想定外』事象は第4層以降の防護策で対応することになっている。

『想定外』事象は、その発生の予見や防止が、①不可能なもの、②可能ではあっても、その方法等が不十分であるものの、2種類に分類することができる。科学技術の発展に基づき、かつ創造力を逞しくして『想定外』の範囲を狭める努力を続ける必要があることは論を待たない。少なくとも上記②については、たとえ発生しても人と環境に重大な影響を与えないよう、設計時に最善と考えられる『多重防護』策を講じておかななくてはならない。そして、『多重防護』の有効性については、日常的に施設の状況を正確に把

握し、かつ積極的に新知見等を取り入れつつ、適宜「ストレステスト」を実施するなどして施設の安全余裕に評価を加え、その結果に基づいて適切に防護策を見直す必要がある。最高レベルの安全水準を達成するには、『多重防護』策を決して固定化することなく、継続的に見直して改善することが肝要である。このような取り組みを続けることが、上記①への対策強化にも繋がるものと期待される。

さて、『想定外』事象にはハードとソフトの両面で対応することが必要となるが、結局、それらを運用するのは人である。人が教えられたとおり、あるいはマニュアルどおりにしか行動できなければ、『想定外』の事象に適切に対処することは望めない。適切な対処には、優れた学識のみならず、現場の状況をも適確に把握する力量を持ち、何よりも考える能力を備えた人材が必要となる。

このような人材の育成について、筆者は実験教育・実験研究の充実が重要と考える。実験に『想定外』は付き物である。実験では、当初の計画あるいは思惑どおり、順調に事が運ぶこともあるが、往々にして『想定外』の事象や現象に遭遇する。その際、実験者はそれらに対応しなければならない。また、実験では結果が実事象として現れるので、実験者は必然的にそれへの対処を迫られる。実験では、バーチャルな世界で物事を扱う計算機シミュレーションなどでは身につけにくい、現場の感覚が養成される。

伝統的に原子力の教育研究に造詣が深く、フィールド科学等の現場における実験的な教育研究に特色を持ち、何よりも「自学自習」の精神を尊ぶ京都大学には、是非とも、考える力を身につけた優秀な人材を育てて輩出するという重要な役割を果たし続けていただくことを願って止まない。

※筆者注：2012年9月に原子力規制委員会が設置されたことに伴い、原子力安全委員会は廃止されたが、本稿で記述した活動及びそれに関連する資料はホームページ<http://www.nsr.go.jp/archive/nsc/>に掲載されているので、ご参照いただければ幸いです。

(しろや せいじ 平成22年退職 元原子炉実験所教授、専門は原子炉物理学)

## 洛書

## モノとのつきあい

下田 宏

戦後の我が国は大量生産・大量消費の波に乗って経済的に発展し、物質的に豊かな暮らしができるようになった。現在では百円均一ショップで多くの日用品が購入でき、身の回りに大量のモノが必要以上に溢れるようになってい



る。これに伴ってか、数年前から「断捨離」、「シンプルライフ」、「ときめき」等をキーワードとした整理整頓・掃除ブームが起り、数多くの掃除関連書籍やテレビの特集番組がある。現代社会では我々が大量のモノとどのように付き合っていくかが問われている。かく言う筆者はどうかというと、あまり整理整頓や掃除は得意ではない。しかし、数年前に研究室が宇治キャンパスから吉田キャンパスへ引っ越したのを機に、それまで溜め込んできた不用品を一気に処分した。

モノが少なく整理整頓された部屋は居心地がよく、逆に片付いていない部屋はなにか落ち着かない感じがする。雑然とした部屋では、気が散って何か仕事に集中できない。人の知覚は感覚器官から入ってきた物理的刺激の意味を読み取ることで外界を認識するものであるが、意識的な意味解釈以前に無意識的な情報処理もなされている。すなわちモノが多く片付いていない部屋では、目に入る様々なモノが視覚刺激となって認知的な負荷がかかり、そこにいてだけで脳が疲れてしまって落ち着かないのである。一方、片付いた部屋は居心地がよく、リラックスできるだけでなく精神的にも安定し、何かを深く考えるのにも適している。

筆者が社会人になりたてで会社に勤めていたころは、その職場で3S、すなわち「整理、整頓、清潔」が徹底されていた。整理とは持っているモノを取捨選択すること、整頓とはモノの置き場所を決めて収納すること、清潔とは埃や汚れを綺麗に清掃することと教わった。このうち「整理」すなわちモノの取捨選択が重要だ。モノが少なくなると、それを片付け

たり掃除したりすることが簡単になる。モノの少ない部屋では収納場所も多く確保できるため、それらを定位置に戻しやすい。また、掃除をする際にもモノの移動が少なくなるため、短時間で隅々まで掃除しやすい。

その他にも、日常的に整理整頓や掃除を徹底していると面白い効果があることに気付く。それは、その行為自体がストレス解消になるということだ。日常の仕事や研究の中には、かなり苦労したにも関わらず、結果が伴わずイライラさせられることも少なくない。しかし、整理整頓や掃除は、自分が働いた分だけ必ず成果が得られる。これは、身体を動かすことによる気持ちよさだけでなく、成果が見えることで自己肯定感や有能感にもつながる。また「良いことをしている」という単純な幸福感も得られる。

モノが溢れる現代社会においては、モノを整理することは不用品を捨てること。簡単そうに思えるが、これが意外と難しい。職場では、そのモノが必要か、不要かは比較的簡単に判断できる。とは言っても、いざ不要と判断したものを捨てる際には、「いや、もしかして将来必要になるかもしれない」という考えが頭をよぎり、なかなか捨てられない。さらに、家庭では「必要かどうか」の合理的判断基準に加えて、「気に入っているかどうか」という曖昧な感性的な判断基準が入るので話がややこしい。家庭では何かを捨てる際に家族のコンセンサスが必要になるが、趣味性が強いモノになると個々人で判断基準が異なるため、結局は捨てられないことになってしまうことが多い。悩ましいところである。

モノを持つ、モノを捨てるということは、モノとの付き合い方を考えるということかもしれない。どのようにモノと付き合うかは、対象となるモノとその個人の価値基準によるので何か統一的な判断基準があるわけではないが、少なくとも資源や環境のことを考えると大量生産・大量消費はあまり褒められるものではない。筆者も最近では、多少高価でもなるべく長く使えるモノを購入するようにしているのだが、元来の百円均一ショップ好きはなかなか止められず葛藤する日々である。

(しもだ ひろし エネルギー科学研究科教授、専門はヒューマンインタフェース)



## 話題

## 科学技術戦略推進費・戦略的環境リーダー育成拠点形成事業「環境マネジメント人材育成国際拠点」第5回シンポジウムを開催

3月8日(金)、百周年時計台記念館国際交流ホールにて、科学技術戦略推進費・戦略的環境リーダー育成拠点形成事業「環境マネジメント人材育成国際拠点(通称：EMLプログラム)」第5回シンポジウムを開催した。

EMLプログラムは、アジア環境問題の解決に貢献する環境リーダー育成を目的に、本学の地球環境学堂・学舎、工学研究科、エネルギー科学研究科の3研究科が、平成20年より実施してきたものである。

海外3カ所にフィールドキャンパス(ベトナムのハノイ、フエ、中国の深セン)を設置し、アジア諸国の大学との積極的な連携を図り、海外長期インターンを必須とするなど、国際的な教育プログラムを展開してきた。

最終年度となる平成24年度のシンポジウムには、本学、各フィールドキャンパスの教員、学生を含め、これまで海外インターン研修の受け入れなどで継続的な教育連携を行ってきたアジア9ヶ国14大学の大学関係者約150名が参加した。

シンポジウムでは、三嶋理晃国際担当理事・副学長に続き、藤井滋穂地球環境学堂・学舎長、北野正雄工学研究科長、宅田裕彦エネルギー科学研究科長が歓迎の挨拶をした。その後、プログラムリーダー

の藤井学堂・学舎長が5年間の活動を総括するとともに、Huynh Trung Hai ハノイ理工大学環境理工学部長、Le Van An フエ農林大学副学長、Guan Yuntao 清華大学深セン研究生院教授が、各拠点における特徴的な教育研究連携の成果を報告した。

午後には、本学の修士課程、博士課程の学生、本プログラムが海外フィールドキャンパスで実施してきた現地コースの修了生らが、口頭発表を行い、活発な質疑応答を繰り広げた。その後のポスターセッションでも、英語で積極的に研究内容を説明し、質問に答える大学院生の姿が見られた。

パネルディスカッションでは、3研究科の教育研究の海外展開プログラムが紹介されるとともに、フィールドキャンパスを設置するハノイ理工大学、フエ農林大学、清華大学深セン研究生院より、継続的な連携教育プログラムの実施、教育・研究プロジェクトでの連携、産官学連携など、積極的な提案がなされ、意見が交わされた。

シンポジウムの最後に、地球環境学堂・学舎とハノイ理工大学環境理工学部、ダナン大学工科大学、カンボジア王立農業大学との間で部局間学生交流協定が締結され、今後の教育連携の発展が期待される。



シンポジウム参加者の様子



地球環境学堂・学舎とハノイ理工大学環境理工学部、  
ダナン大学工科大学、カンボジア王立農業大学との  
部局間学生交流協定の締結

(地球環境学堂)

## 図書系職員の海外調査研修を実施

図書館機構では、「京都大学の国際戦略」にもとづき、国際交流推進機構の基盤強化経費の助成を得て、図書系職員の海外調査研修を毎年実施している。

平成24年度は、経済学研究科整理掛長の梶山暢子氏と、人間・環境学研究科情報管理掛員の塩野真弓氏、工学研究科総務課図書掛の長坂和茂氏の3名を米国に派遣した(所属はいずれも当時)。平成25年1月13日から1月20日まで、米国議会図書館、オハイオ州立大学、Online Computer Library Center (OCLC)、コロンビア大学の4機関を訪問し、英米目録規則(AACR2)に代わる新しい目録規則「Resource Description and Access (RDA)」の策定と、導入する上での問題点等について調査を行い、無事帰国した。

3名は、本調査研修の計画段階から調査実施まで、目録規則を中心とした国内外の図書館の現状の把握に努めるとともに、各自コミュニケーション能力を活かして交渉・インタビューにあたり、多くの知見を持ち帰ることができた。図書館機構では、3



OCLCのWorldCatサーバの前で  
(Bill Roggeオペレーションマネージャーと)

月14日(木)に全学の図書系職員を対象に報告会を行い、その成果を共有した。

なお、研修の成果報告書は、国際交流推進機構のホームページに掲載している。

[http://www.opir.kyoto-u.ac.jp/opir/s\\_haken/tosho.html](http://www.opir.kyoto-u.ac.jp/opir/s_haken/tosho.html)

(附属図書館)

## 宇治キャンパスで桜植樹記念式典を挙行政

宇治キャンパスで、3月11日(月)、桜植樹記念式典を開催した。

今回の植樹は、平成23年度末に完成したキャンパス前道路の拡幅工事に伴い、塀を全面撤去し、オープン化されたキャンパス玄関の景観整備の一環として、一般財団法人建築研究協会のはからいで、日本さくらの会、イカリ消毒株式会社より寄附をいただき実現したものである。

式典では、宇治地区世話部局長の津田敏隆生存圏研究所長からの式辞、西本孝一 建築研究協会常務



記念碑と桜を囲んだ集合写真



理事より植樹に至る経緯の報告，黒澤眞次 イカリ消毒株式会社取締役会長の挨拶の後，日本さくらの会さくらのプリンセスである川瀬陽子氏より津田所長に目録が贈呈され，西阪 昇理事・副学長より日本さくらの会，イカリ消毒株式会社に感謝状が贈ら

れた。

その後，来賓による記念植樹，記念撮影が行われ，あたたかな日差しの中，終始なごやかな雰囲気の中に式典は終了した。

(宇治地区事務部)

## 人文科学研究所 第8回 TOKYO 漢籍 SEMINAR を開催

人文科学研究所では，3月19日(火)，東京の学術総合センター一橋記念講堂において第8回TOKYO漢籍SEMINARを開催した。

本セミナーの目的は，人文科学研究所が80年にわたって蓄積してきた中国学研究の成果をわかりやすく紹介し，多くの人々に漢籍，ひいては漢字文化全般に関心を深めてもらおうとするものである。

富谷 至同研究所附属東アジア人文情報学研究センター長の開会挨拶に始まり，「清華の三巨頭」をテーマに，井波陵一教授「王国維—過去に希望の火花をかきたてる」，古勝隆一准教授「陳寅恪—“教授の教授”その生き方」，池田 巧准教授「趙元任—見えざることばを描き出す」の三講師による講演が行われた。「どの講演も興味深く，資料が充実しており，講師の話もわかりやすくよく理解できた。次回も楽しみであり是非参加したい」という感想をいただく



セミナーの様子

ただけでなく，参加した151名のほとんどが10時30分から16時までという長時間を最後まで熱心に聴講した。

なお，次回第9回TOKYO漢籍SEMINARは，「木札に書かれた中国古代—よみがえる日々の暮らし」をテーマに，平成26年3月に開催する予定である。

(人文科学研究所)

## 電子書籍「世界の料理」を発行

農学研究科・農学部には世界中から常時100名を超える留学生や研究者，客員教員が在籍している。同研究科・学部の国際交流室は，その活動の一環として平成16年から平成20年にかけて，彼らによる「料理講習会—World Cooking Class」を開催した。

講習会では留学生たちと日本人教職員・学生が一緒になって食材の準備から調理まで行い，できあがった料理を囲んで和気あいあいと楽しんだ。この講習会は大変好評で，合計31回開催され，参加人数



表紙

も延べ600名近くに及んだ。そこで紹介された留学生たちの母国の家庭料理レシピをまとめ，電子書籍「世界の料理」として，3月22日(金)に発行した。日英併記で27の国と地域，128の料理が紹介されている。料理だけでなく各国の自然や文





アルゼンチン料理のページ

化遺産の写真もあり、美しく楽しい、ひと味違う料理本になっている。興味をもたれた料理があれば作ってみてほしい。同書のpdf版とiBook版が、以下の国際交流室ホームページからダウンロードできる。  
<http://www.fsao.kais.kyoto-u.ac.jp/index.php>

これから留学、海外出張される方にもきっと参考になることと思われる。同書がよりいっそう本学の国際交流に貢献することを願っている。

(大学院農学研究科)

## 化学研究所所蔵「人造石油」の資料が化学遺産に認定

3月23日(土)、化学研究所所蔵の「人造石油」に関する資料が、公益社団法人日本化学会の「化学遺産」に認定された。化学遺産は、日本の化学と化学技術に関する歴史資料の中で、特に貴重なものが認定対象とされる。今回認定された資料は、戦前・戦中の京都帝国大学におけるフィッシャー・トロプシュ法(FT法)による人造石油の研究および北海道人造石油株式会社滝川工場での、その実用化に関わる資料・試料類である。



左から、小田真人 滝川市教育委員会教育長、  
玉尾皓平 日本化学会会長、佐藤化学研究所長

人造石油に関する研究と工業化は、戦前・戦中の日本での石油不足を解消するために国策として進められた。京都帝国大学の喜多源逸研究室では、大正6年から、児玉信次郎教授らによりFT法触媒の基



(左)認定証、(右)人造石油サンプル

礎的研究が開始され、入手容易で安価な鉄系触媒を開発した。化学研究所での中間工業試験、北海道人造石油の留萌研究所での加圧式による工業試験の成功(昭和17年)を経て、昭和19年8月北海道滝川市で鉄触媒本格炉の試運転が始まったが、まもなく終戦を迎えた。これは戦後の石油化学工業につながる事業であり、本学では燃料化学科の設立ならびに学界・産業界に多数の有意な人材を送り出したことに繋がる。

認定証贈呈式は、立命館大学びわこ・くさつキャンパスにて開催された日本化学会第93春季年会の各賞表彰式に引き続いて行われ、佐藤直樹化学研究所長と滝川市教育委員会の関係者にそれぞれ認定証が手渡された。

(化学研究所)

## 宇治おうばくプラザで「第4回たそがれ花見コンサート」を開催

宇治地区では、4月5日(金)午後6時より、宇治おうばくプラザきはだホールにおいて、京都大学音楽研究会器楽部、宇治市立東宇治中学校吹奏楽部による「第4回たそがれ花見コンサート」を開催した。

宇治地区部局長会議世話部局長の佐藤直樹化学研究所長の挨拶の後、器楽部によるピアノ・オーボエの演奏と、吹奏楽部によるクラリネット四重奏、金管八重奏の演奏が行われ、参加者はすばらしい演奏

に耳を傾けていた。終了後は会場前にて桜のライトアップも実施され、すばらしい春の夕べとなった。

このコンサートは、毎年、地域住民の方々、宇治地区教職員、学生など多くの来場者を得ており、今回地域交流の一環として出演いただいた東宇治中学校吹奏楽部の演奏も大変好評で、地域の春の恒例行事として毎年の開催を期待する声が多くあった。



東宇治中学校吹奏楽部による演奏



京都大学音楽研究会器楽部による演奏

(宇治地区事務部)

## 第1回 START 2013新入生歓迎大交流会を開催

本学で初の大規模学生プラットフォームである団体連盟START(代表：総合人間学部3年生 村上岳氏、顧問：中原有紀子産官学連携本部研究員、後援：産官学連携本部)は、4月17日(水)、ダイキン工業株式会社、株式会社サイバーエージェント等10企業の協力を得て、新入生歓迎と在学生の異分野融合を目的とした新入生歓迎大交流会を、百周年時計台記念館において開催した。

震災復興のための活動をする「KIZUNA」や教育格差是正に取り組んでいる「Teach For Japan」、Webサービス・アプリ開発をする「CAMPHOR」、その他にも「日本模擬国連京都研究会」、「発明塾」、

「京都有着物企画」など24団体が協力し、プロモーションビデオの作成や2万枚のビラによる告知、フェイスブック上での呼びかけを行い、当日に臨んだ。

交流会では、各団体が3時間にわたるブース出展を行い、訪れる参加者に対して、団体の理念や活動内容を丁寧に紹介した。

また、前方のステージでは、外国人観光をサポートするMeetUs Kyoto代表の品川皓亮氏(本学法科大学院修了)と京都観光商品・サービスを手がける株式会社のぞみ代表取締役 藤田功博氏(本学経済学部卒)による「京都・京大のおもしろさ」や、交換留学支援団体ESSK代表 西村 哲氏(農学研究科修士





MeetUs Kyotoの品川代表と株式会社のぞみの藤田代表取締役によるパネルディスカッション

課程2回生)とwebマーケティングを手がける株式会社インフォバーン 京都支社長 井登友一氏による「新入生よ、これをせよ!」というテーマでパネル

ディスカッションが行われた。新入生だけでなく、在学生にとっても非常に有意義なテーマであり、熱心に聞き入る姿が印象的であった。

本学において、このように学生団体が一堂に会する機会はなく、STARTによる今回のイベントは初の試みであったが、新入生が多数の団体を比較しながら選べるというだけでなく、参加団体間の横のつながりや在学生と卒業生との縦のつながりを広げる素晴らしいものになった。

イベント終了後の懇親会には、スポンサー企業や教員も招待し、参加団体の学生達は社会人と直接話すことで、将来についてアドバイスを受けることができ、有意義な内容となった。

(産官学連携本部)

## 訃報

このたび、ヨリッセン フランツ エンゲルベルト Jorissen, Franz Engelbert教授が逝去されました。ここに謹んで哀悼の意を表します。以下に同教授の略歴、業績等を紹介いたします。

### Jorissen, Franz Engelbert 教授



Jorissen, Franz Engelbert 先生は平成25年3月21日に逝去された。享年56。先生は昭和55年5月ケルン大学・教育学・イタリア文学・ドイツ文学専攻を卒業した後、同年10

月ケルン大学ロマン文学講座共同研究員、同58年4月京都市立芸術大学非常勤講師、同59年4月京都外国語大学非常勤講師、同62年12月国際日本文化研究センター外国人研究員(客員助教授)、同63年3月ケルン大学ロマン文学講座共同研究員、同年8月同講師、同年11月ケルン大学Ph.D(文学)取得、平成5年4月京都大学総合人間学部助教授、同17年4月同大学大学院人間・環境学研究科教授に就任された。

先生は、ルネッサンス・バロック期のヨーロッパ

人による日本観形成に関する独創的な研究を多数発表し、国内外で高い評価を得た。先生の研究は特定の宣教師や商人の日本観を解明するにあたり、彼らの報告書の構成や特徴を、同時代および後世の様々な立場のヨーロッパ知識人(史家・思想家・宣教師など)の著作との比較検討を通して考察した点、これによりヨーロッパ人の日本観形成の源泉や日本観の変容についても解明した点、さらに文学研究における「表象理論」も援用した史料分析を行なった点において、従来の東西交渉史研究とは一線を画す独創的なものであった。さらに、『十六・七世紀イエズス会日本報告集』(第二期・第三期)の翻訳も手がけ、南欧諸語で書かれたイエズス会文書が史学研究の場で広く認知・活用され、多大な貢献をなした。

(大学院人間・環境学研究科)